

三重大学教育学部 国際交流 ニュースレター

— No. 13 —

平成23年2月9日発行
国際交流委員会
三重大学教育学部



天津師範大学新キャンパス

天津師範大の学生との150日間

社会科教育講座 准教授 大坪慶之



News from TNU

8月末から五ヵ月間、天津師範大学に滞在し、日語実験班の教育に携わった。実験班の授業は、これまで八里台にあるキャンパスで行われてきた。しかし、郊外の新キャンパスへの段階的な移転に伴い、八里台キャンパスは今夏に、教学楼・逸夫楼・ホテルのある一画を除き売却されていた。そのため、両キャンパス間を往復することになった(到着後間もなく、旧校舎や旧学生寮の解体工事が始まった)。最初に師範大学側から受けた説明では、移転により学生寮が教員・日本人留学生の宿舎と別々になったため、授業以外で日本人と交流する時間が減り、日本語の会話能力向上に影響がでるのではないかと心配しているとのことであった。そして、「学生たちは、これまでで最も自分たちに年齢の近い先生が来るというので楽しみにしている。積極的に交流してほしい」と要請された。日本語教育の経験のない自分が、どこまで期待にこたえられるのか不安もあったが、せっかくの機会なので学生たちとの距離が少しでも縮まるよう努めた。

現在、天津にいる学生は、一年生と三年生で構成されている。私は、両方の学年の授業を受け持った。一年生は、「日語口語」(日本語会話/週2コマ)を担当した。入学したての学生に、習い始めたばかりの日本語を使い教えるわけにはいかず、中国語に板書とジェスチャーをまじえて何とか説明しつつ、初歩的な会話の練習をすることにした。しかし、なかなか思うようにはいかなかった。恥ずかしいという気持ちが先に出るのか、学生が最低限の場面でしか日本語を使おうとしなかったのである。そこで現地に滞在し、一年生を指導した経験を持つ先生に相談してみた。すると、「会話の授業は、学生たちを遊ばせるぐらいの気持ちがないと、自発的に、たくさん発音させることは難しい。そのためには教員も、恥をかく必要がある」とアドバイスしてくださった。そこで一緒に歌を歌い、早口言葉を練習するなどしてみた。学生は、当初は何が起こったのかと戸惑いの色を隠せない様子だったが、次第に打ち解け、授業中か否かを問わず、日本語で積極的にコミュニケーションを取ろうとするようになってくれた。また、歌や早口言葉は、想像していた以上に発音の上達に効果があった。

三年生の授業は、「日本概況」を担当した。授業は、「日本歴史と文化」との兼ね合いから地理・公民を中心に進めた(担当される先生のご厚意で、ゼミ形式で行う「日本歴史と文化」にも参加させていただいた)。外国人にとって、日本の地名や風土、政治の仕組みな

どを理解するのは決して容易なことではない。それを日本語で習い、理解しようと努力する姿勢には感心させられた。授業では、グループ討論も取り入れた。毎回テーマを設定し、日本語で意見を出してもらった。学生の反応は回によってまちまちであったが、就職や恋愛・結婚といったテーマでは、みな興味関心が強いためか、非常に活発な議論となった。また、日本文化の体験学習の一環として、百人一首のカルタ大会を開催した。計画時は、果たして日本語を音だけで聞いて、文語で書かれた札を取ることが可能なのか心配された。しかし、学生の適応能力はすばらしく、すぐに慣れて日本人と変わらないレベルで札を取り合うようになり、会は大盛況となった。



百人一首を楽しむ天師大の学生

帰国を前にした1月、昼食を一緒にとっていた学生の一人が、こんな言葉を口にした。「そういえば、先生は日本人なんだよね」と。ある意味当たり前なことだが、よくよく考えてみると、その言わんとするところが分かってくる。おそらく彼女の頭にあったのは、国や民族の違いは、入学前に思っていたほど気になるものではなかった、ということなのだろう。この感覚が、これから先どうなっていくのか興味深いところである。しかし私と、自身の好きなマンガやドラマ、興味のあることを話して過ごす中で、日本人と変わらぬ姿を見せてくれた学生たちである。仮に三重大に来てから、文化や習慣の大きな違いを見つけることがあるにしても、そんなことは気にせず、日本人と国や民族の違いを超えた関係を築くことで、実りある留学生活を送ってほしい。



協議を終えて記念撮影/左より、平井教授、早瀬、Gómez 副学長、Guerra 国際学術担当者

海外大学訪問

ジャウメプリメル大学訪問

英語教育講座 教授 早瀬光秋

平成22年度三重大国際交流事業経費を受け2010年9月12日から17日(実質滞在期間は3日)まで、工学研究科平井淳之教授と共にスペイン、バレンシア州に位置するジャウメプリメル大学(Universitat Jaume I 略称 UJI)を訪問した。

UJIは1991年に設立された大学で人文学部(教育学部の要素を含む)、工学実験

科学部、法学・経済学部の3学部を有し、800人の教員のもとで学生数13,000人が学んでいる。ヨーロッパ、南北アメリカ、オーストラリア、そしてロシアの約200の大学と提携している。アジア地域との提携は今のところ無い。2009年度には360人の学生が交換制度により外国で学び、242人の交換留学生を受け入れ、国際交流の盛んな大学である。

滞在中、国際交流担当副学長である Inmaculada Fortanet Gómez (Dra.) 副学長と協議を行った。Ana Fernandez Guerra (Dra.) 国際学術担当者も同席した。三重大学 (MU) の概要を説明したあと、両大学の交流の意義について話し合った。副学長としては、実現可能な交流内容に興味を持っており、MUでの英語による授業について関心を示した。その後、Guerra 国際学術担当者、Teresa Blasco Izquierdo (Sra.) 国際交流課長、Marga Gonell Ibañez (Sra.) 留学生担当者と協定の仕方について具体的に話し合い、基本的に大学間協定書、学生交換覚書についてはMUのものを使用する、学生交換は相互授業料免除とする、との合意を得た。さらに、早瀬と平井教授は関連学部の教員との意見交換を行い、教育最新テクノロジーセンター、外国語教育センター、言語自習センター、図書館等を見学し、第2言語としてのスペイン語授業を観察した。また平井教授は「日本におけるロボット工学研究の現状」と題して、早瀬は「日本の英語教育」と題して講演を行った。

海外教育研修

オークランド大学教育学部での教育研修に向けて

理科教育講座 教授 後藤太一郎

8年近く前に、ニュージーランドで出版されている高校生から大学初年次向けの生物学教科書を見る機会がありました。この本には日本では見当たらない素晴らしい特徴がみられたことから、その日以来、ニュージーランドの生物教育に関心をもち始めました。2009年9月にオークランド大学教育学部理科教育の Haslam Carolyn 氏のご協力により、同学部の訪問と、近隣の中学・高校における理科や生物の授業を参観する機会を得ました。この訪問に関心をもった私の研究室の学生2名と、同僚の教職員2名と一緒に行きました(写真1)。

授業参観では、授業前には授業目的の説明、授業後には授業に対する質疑を設けてくださり、授業に対する自信が感じられました。生徒の人種も多様であり、ニュージーランドにおける多文化に対する教育の重要性を知る機会にもなりました。

オークランド大学は世界でもトップクラスの大学であり、教育学部の学生数は約5000人と規模が大きく、教育方法に対する自信と誇りをもっています。様々な教育プログラムが用意されていること、空港から大学までが近いことなど、教員を目指す三重大学教育学部生の国際性を育むために、多様な人種がいるニュージーランドでどのような教育が行われているか、大学の授業をはじめ、教育現場を見ることは大きな意義があると思いました。自然の豊かさ、人々がとても親切で安全であること、日本食店の多いことなど、日本人にとっては海外で過ごす上で快適な条件もそろっています。

そこで、オークランド大学における教育研修プログラムを実施するために、国際交流事業助成を受けて準備を進めました。2010年9月には英語教育講座の荒尾浩子先生と一緒にオークランド大学教育学部国際交流副学部長を訪問し、計画したプログラムについて意見交換をしてきました(写真2)。企画はほぼ受け入れられ、ニュージーランドの教育事情に関する講義、オークランド市内の幼稚園、小学校、中学校の授業参観と振り返り、およびオークランド大学教育学部の授業参観からなる教育研修です。2011年9月下旬に約10日間の日程で実施するための準備を進めています。

以下は、2009年にオークランド大学と一緒に訪問した、当時4年生の中泉久子さんの感想文です。この教育研修が教育学部の学生の皆さんにとって価値あることを願っています。



写真1 オークランド大学での打ち合わせ



写真2 国際交流担当のお二人

オークランドを訪問して (2009/09/01~06)

理科教育コース 21年度卒業生 中泉久子

先住民や世界各国からの移民が多く住むニュージーランドでは、街を歩けば様々な国の人に出会うことができます。そのため街には、中国、韓国、ベトナム、タイ、日本、トルコなど様々な国のレストランや物産店が並んでいます。スーパーの食料品に関しても、世界中の食品が集まり各国の料理が楽しめるようになっていました。世界各国の人が集まり様々な文化が息づいている、いろんなものが混ざり合いながらも尊重し合いながらできている街だと感じました。

ニュージーランドは自然が豊かであり、大きな都市であっても海や山がとても美しく見ることができます。オークランドもそのような都市の一つでした。その都市の中心部に位置しているのがオークランド大学のシティキャンパスです。購買や書店も広く充実しており、新しくきれいな建物も多くありました。街の中心部に位置しているのにも関わらず、緑も多く、広々としたキャンパスでした。この大学は留学生の受け入れを積極的に行っていることもあり、世界各国の学生が在籍しており、キャンパス内はとても人が多くにぎやかでした。

オークランド大学教育学部のキャンパスはメインキャンパスとは異なり、都市中心部から少し離れた郊外にあります。これが一つの大学かと思ってしまうほどとても広い敷地でした。

そこで案内してくれたのが教育学部の Haslam Carolyn 先生でした。Haslam 先生は Epsom Girls Grammar school という女子高等学校と Mt Roskill Grammar School という中高一貫の6年生学校の2校を紹介してくださいました。両校とも留学制度が進んでおり、様々な国の人たちが一緒になって生活していることから、「自由」という印象を受けました。自分の席も自由であり、制服も宗教の関係から違うものを着ている子も多くいました。また、しっかりとノートをとって、教科書を読んで、という日本のような講義形式の授業とは違い、手を動かした作業を取り入れていたり、グループになって意見を交換しあったり、体や頭を使う授業を行っていました。授業中であっても先生への質問が多く、生徒たちが積極的に授業に取り組ん

でいる様子がうかがえました。先生方もたくさんの教科書、参考書等を活用したり、日本では行わないようなおもしろい実験を授業に取り入れたりと生徒たちが楽しく授業に参加できるように工夫していました。

今回、ニュージーランドの中学校、高等学校見学して印象に残ったのは、自由でありながらどの生徒も積極的に学業に参加しているということです。このことは、生徒一人一人が学びに

対する意識が高いということもありますが、それに加えて先生の技術力の高さからもきていると感じました。

ニュージーランドでの学校見学は、生徒を引き付け、より楽しい授業を行うことができる様々な要素を知ることができます。また、日本での授業と比較することで、日本の授業形態の良い点、悪い点を再認識できるはずで、将来教師を目指すうえで、授業作りに役立つ多くのことを学ぶことができると感じました。

国際インターンシップ

「どうしてユリアーネ先生の髪の毛は金髪なの？」 特別支援学校での国際インターンシップ

ユリアーネ・シュタイン

私は、10月から11月にかけて、1ヶ月間三重大学の国際インターンシッププログラムに参加し、三重大学教育学部附属特別支援学校で研修させていただきました。

特別支援学校には小学部・中学部・高等部があり、生徒50人と先生20人がいます。先生たちは毎日体育と美術でたいへん忙しいです。特別支援学校で行われている指導方法を総合的に学ぶために、私が担当するクラスは2日ごとに変わり、結果として今回の教育実習を様々な視点から捉えることができました。最初は、自分の日本語能力が不十分ではないかと心配しましたが、先生方に親切にさせていただいて、安心して教育実習を続けることができました。そのため私は、例えばお互いに言葉が分からない時でも相手の様子を見ながら共に分かり合うことができると実感し、生徒全員と一緒に楽しく時間を過ごすことが出来ました。

たった4週間の滞在でしたが、生徒は私が外国人であることをあまり問題視せず、仲間として受け入れてくれました。また、私の国に対する関心ももってくれたようです。暇な時には、よく子供たちにあれこれと質問もされました。このような交流を通して、お互いに学びあう気持ちを高めることができたと思っています。インターンシップで学んだ子どもの指導方法は、私にとって重要な経験となり、きっと将来役立つことができるだろうと信じています。



多文化共生活動

第11回みえ国際子どもフェスタ



平成23年1月10日(月)、三重県在日外国人教育研究会(県外教)主催、国際交流委員会共催で「第11回みえ国際子どもフェスタ」を開催しました。当日は104名(児童生徒61名、保護者・関係教員22名、学生21※内留学生10名)の参加があり、大変にぎやかなイベントとなりました。午前は学生を対象に県外教の先生方から三重県内における外国につながる子どもたちを取り巻く問題と取り組みについて講義をしていただきました。午後からは子どもたちも参加し、①中国文化体験(羽蹴りとゴム飛び)、②朝鮮半島の文化(チャンゴ演奏)、③在日外国人中高生交流会の3グループに分かれ、活動を行いました。中国文化紹介では教育学部で学ぶ留学生が大活躍してくれました。子どもたちはもちろん、学生たちも、遊びや楽器演奏の楽しい体験や子どもたちの生の声を聞くことによって、日本の中にある多文化を感じる事ができ、大変貴重な機会となりました。今後も真の多文化共生につながる活動を行って行きたいと思います。

[写真上：中国の羽蹴り / 写真下：朝鮮半島の楽器チャンゴ演奏]

学生海外留学報告

半年間の留学生活を経て 英語教育コース4年 牛田百合佳

40%。これが、留学当初の私が聞き取れた、ネイティブスピーカーの英語でした。私は2010年6月から12月の半年間、アメリカのノースカロライナ大学ウィルミントン校で交換留学生として勉強しました。飛行機に乗るのも初めての私にとって、この半年の留学生活は、毎日新しい発見と貴重な経験ばかりで

した。その中でも一番は、英語をコミュニケーションのツールとして使っている社会に浸かり、改めて自分の英語力のなさを痛感したことです。私の英語は知識であって、使える英語ではありませんでした。特に私はリスニングが非常に苦手だったので、ネイティブスピーカーと会話をしたり、レストランで注文



ハロウィーンでの仮装(2010年10月31日)

するときなどは何度も聞き返したり、聞き間違えて恥ずかしい思いもしました。しかし、毎日の生活で失敗を重ねながら自分の英語と向き合い、向上

させていくことができました。また、アメリカ人の友達やほかの国から来た留学生友達もたくさんでき、そういった友達といろんなところに遊びに行ったり、旅行に行ったりしました。その中で、アメリカはもちろん、その他の国の文化も学んだり、アメリカでできない貴重な体験もでき、改めて英語とアメリカ文化の魅力を実感しました。これからも英語力を身につけていくとともに、この留学の経験を活かして、将来英語教師になりたいとき、子どもたちにその魅力を伝えられるような教師になりたいと思います。

Fun time in UNCW 英語教育コース4年 清川 藍

私は、昨年6月の中旬から12月の中旬頃までの半年間、アメリカのノースカロライナ州にあるUNCWに留学しました。

私は、秋の新学期が始まる前に、ESLプログラムに参加しました。英語を第2言語として勉強している人のための4週間のプログラムで、平日は授業があり、毎週金曜日には校外見学で学校の近くのビーチに行き泳いだり、水族館に行ったり、古い街並みを散歩したりしました。非常に濃い時間でした。

日本人の他に、韓国、中国、ロシアをはじめ、スペイン、ドイツ、フランスなどのヨーロッパ諸国、ブラジル、エクアドル、ベネズエラ、オーストラリア、トルコ、サウジアラビア、ヨルダンなど、と本当に様々な国の学生がいたので、アメリカの国以外の文化にもたくさん触れることができました。週末には、友達の家でよくパーティーをし、そこではそれぞれの国の音楽を流し、ダンスを披露し合ってみんなで踊りました。特に、ブラジルの友達は情熱的で、熱心なサンバのレッスンはとても印象的です。日本にいとあまり馴染みのない国の人と仲良くなり、その国の文化を知り、関心を持つことができ、視野が広がったような、世界をみる目が変わりました。

新学期が始まると、大学に学生がたくさん戻り、新たな留学生もたくさん来たので、いよいよ本番という気持ちになり、緊張感がより高まりました。授業もアメリカ人の学生に交じって受けるので、最初の頃は、毎回授業が終わると疲労感に襲われ



ESL 修了式にて

ました。しかし、先生方は私たち留学生にとっても協力的で、質問や補習に対して丁寧に応じてくださいました。友達にも助けてもらい、とても楽しく学習することができました。

一日一日があっという間に過ぎていき、非常に充実した日々を過ごすことができました。はじめの頃は、日本の生活が恋しいと感じることもありましたが、すぐにUNCWでの生活に慣れ、日本に帰りたくないと思うほどでした。いつか必ず、もう一度ウィルミントンを訪れようと思います。

3 大学国際ジョイントセミナー&シンポジウム参加学生報告

夢が叶う三つの方法

教育学研究科国語教育専修 1年 魏敏(Wei Min)

こんにちは、占術研究家の魏敏です。今日は、ナント、夢が叶う三つの方法を紹介しちゃいまーす…なんて言うわけがありませんが、タイにいる四日間中心願成就のための努力?についてちょっとお話ししたいと思います。

遠い昔、(というのも2009年の10月頃ですが)、国語教育ゼミで指導教官がこういう風に仰っていました、「みんなはこれから教育の現場に立つものだから、夢を語らない」と。それは、あの日の日記を輝かせる一言でした。今でもはっきり覚えているということは、これからも記憶に残る一言になるでしょう。しかし、自分の場合は、「もともと夢見る乙女タイプじゃないし…」というところがないとも言えないので、夢を持つ必要性があつた時、十分に伝わってこなかったのかもしれませんが、それが、一年経ったこの頃、「夢を持ってあげよかつた」と、悔しい思いでいっぱいです。その悔しさは、正にタイでの異文化体験と、切っても切れない関係があるのです。

出発の日の慌ただしさを癒すために、ウェルカムパーティが用意されました。遊びながら、食後の甘いパイヤを味わっている真最中、みんなが同じ方向へ向かって去っていったのです。スタッフに聞いてみると、川辺に夢を叶えるための儀式が行われているようで、早速行ってみました。騒いでいる人ごみを抜けて見ると、日本の灯笼流しらしき行事がありました。灯笼の形と言えば、生花で彩られた小さいかごで、真ん中にろうそくが一本飾ってあります。ろうそくを点して花籠を川に流すと、夢が叶うらしいです。急いで友達を呼んできて、もう花籠で十分混雑している水面に、頑張って(少し無理矢理に)自分の花籠を仲間入りさせました。が、その後のことです。「By the way, what's your dream?」と隣の人に聞かれて、「えっ?」と思う瞬間でした。夢か…必死に思い出そうとしても多分ナイと思うので、ちょっと残念な気分、ぼんやりした顔で段々遠ざかっていく花籠を見つめながら、せつかくのチャンスが無駄使いし

てしまったなど、思わず溜め息をつきました。

同じようなことがまた起こったのはその次の日のパーティーです。紙製の熱気球を四人で空へ飛ばす行事でした。中国では「孔明灯」と言って、お正月に放つものはタイで「コムロイ」と呼ばれるようになってきているらしいです。「願い事をしながらコムロイを放つよ」と言われましたが、私にとって手を放すのが簡単で願い事を考えるのが何だか難しく感じました。「じゃ…世界平和にしとこっか」とニヤニヤ笑いながら、オレンジ色になって徐々に上がっていく孔明灯の写真を何枚か撮りました。

もう終わりかと思ったら、まだあるのです。自分で名づけて「白い糸儀式」です。ちょっとミステリアスな儀式で、右手の手首に白い糸をつけられて、それが切れた時、願が叶うらしいのですが、つけてくれる人に「Wish your dreams come true」と言われて、私…こんなに多くの夢を持っておりませんが、と正直に答えたかった。今や灰色になってきているその白い糸はまだまだ元気、切れる気にはなれないみたいです。ということは、切れるまで夢を考え出せば良いのではないかと、今この文章を打ちながら漸く思いつきました。

以上、今日はタイで体験した夢が叶う三つの方法を紹介させていただきました。花籠を川に流すこと、孔明灯を空に放つことと白い糸をつけられることです。しかしそれらの前提としては、実現させたい夢を常に持っていなければなりません。夢なんて…と思っていた私は、今こたつの中でサンタさんを待ちながら、異国で無駄使いた三つの方法を思い出して悔しんでいます。「ホントに夢を持ってればよかつたのに」と。今度こそ、夢を叶えるチャンスを見逃したくないと思って、今から夢を少しずつ描いていこうかと初めて真剣に考え出しました。



第17回3大学国際ジョイントセミナー&シンポジウムがタイのチェンマイ大学で開催されました(2010.11.10-13)。教育学部から参加した魏敏さんの発表("Cultural Exchange Based on Loanwords in Japanese")は、Communication部門でBest Presentation Awardを得ました。